

《中学校 社会科》

社会的事象を多面的・多角的に捉え思考力・判断力・表現力を高める生徒の育成 ～「問い」に対する自らの考えを再構成する学習活動を通して～

那覇市立鏡原中学校教諭

新垣 百代

〈研究の概要〉

生徒の実態として、「問い」に対して自分の意見を述べるだけで終わることが多く、自分の考えを深め表現することに課題が見られた。また、単元の振り返りで自らの考えを再構成する場面では、多面的・多角的な視点による記述が少なく、表現力が十分でないことが伺える。

そこで本研究では、授業における学習課題に迫る「問い」に対して、資料を活用し、思考・判断したことを対話的な学習活動を通して表現する授業を行った。そして、単元の導入で「問い」に対する予想を立て、思考の変容を記録した振り返りシートを活用し、まとめでは予想に対して再構成する学習活動を行った。

その結果、生徒は、「問い」を解決する場面で、根拠となる資料の活用と対話的な学習活動を通して、複数の視点を獲得し社会的事象を多面的・多角的に捉えることができた。また、単元の振り返りの場において、思考の変容を記録した振り返りシートを活用し、再構成する学習活動を行うことで、生徒は思考力・判断力・表現力を深めることができた。

以上のことから、「問い」に対する自らの考えを再構成する学習活動を通して、生徒が社会的事象を多面的・多角的に捉え、思考力・判断力・表現力を高めることができたと考える。

〈研究のイメージ〉



目 次

I	テーマ設定の理由	31
II	研究目標	32
III	研究仮説	32
1	基本仮説	
2	作業仮説 (1)(2)	
IV	研究構想図	32
V	研究内容	32
1	社会的事象を多面的・多角的に捉え思考力・判断力・表現力を高める生徒の育成とは	
(1)	社会的事象を多面的・多角的に捉える学習活動とは	
(2)	自らの考えを深めるための対話的な学習活動の工夫	
(3)	社会科における思考力・判断力・表現力の育成	
2	「問い」に対する自らの考えを再構成する学習活動とは	
(1)	再構成を促す「問い」とは	
(2)	自らの考えを再構成する学習活動とは	
VI	授業実践(第1学年)	34
1	単元の概要	
2	本単元の指導と評価計画(全8時間)及び本単元に係る学習の系統	
3	本時の指導	
(1)	目標	
(2)	授業仮説	
(3)	本時の展開	
VII	結果と考察	37
1	作業仮説(1)の検証【結果】【考察】	
2	作業仮説(2)の検証【結果】【考察】	
VIII	成果と課題	40
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献》

社会的事象を多面的・多角的に捉え思考力・判断力・表現力を高める生徒の育成 ～「問い」に対する自らの考えを再構成する学習活動を通して～

那覇市立鏡原中学校教諭 新垣 百代

I テーマ設定の理由

近年、社会は急速に変化し予測が困難な「Society5.0 時代」を迎えている。このような時代を生きる子供たちには、社会の変化を的確に捉え、他者と協働しながら主体的に課題を解決し、新たな価値を生み出す資質・能力が求められている。

学習指導要領解説総則編では、「生きて働く『知識・技能』の習得、未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成、学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の三つの柱に整理された。また、中央教育審議会による「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（令和3年1月26日）では、「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにする」と示されている。これらを踏まえると、生徒が「問い」に向き合い、他者との対話や協働的な活動を通して、自分の意見を構築・表現する探究的な学びが求められる。

生徒の実態として、令和7年度沖縄県児童生徒質問調査では、「社会の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」の肯定的意見が88.7%であり、「社会の授業の内容はよく分かる」の肯定的意見は80.2%と、生徒は社会科学習に興味・関心があり必要性は自覚している。しかし、検証前に実施した単元テストのうち思考力・判断力・表現力を問う問題では、平均正答率は54.7%に留まり、思考力・判断力・表現力の育成に課題が残されている。また、検証前に実施したアンケートでは「振り返りで整理することで、新たな気づきがあったり、分からないことが理解できたり、自分の考えが変わったりしているのをまとめている」の肯定的意見が21.7%と低く、自分の考えを再構成する学習が十分に定着していないことが明らかになった。

これまでの授業実践を振り返ると、「問い」に対して、生徒が考えをまとめて発表する場を設けてきた。しかし、その内容は、自分の意見を述べるだけで終わることが多く、自分の考えを深め表現することに課題が見られた。特に、単元を貫く「問い」に対して自らの考えを再構成する場面では、社会的事象を一つの視点から捉え、単元の学習を総合的に考察できていないことが伺えた。このため、多面的・多角的な視点を含めた記述が少なく、表現力が十分でないことが明らかとなった。

そこで本研究では、生徒が表面的な理解に留まらず社会的事象に対する理解を深めるために、根拠となる資料を活用した対話的な学習活動を行う。また、「問い」に対する自らの考えを再構成する学習活動を通して、社会的事象を多面的・多角的に捉え生徒の思考力・判断力・表現力が高まると考え、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

社会的事象を多面的・多角的に捉え思考力・判断力・表現力を高める生徒を育成するため、「問い」に対する自らの考えを再構成する学習活動を取り入れた授業実践を行う。

Ⅲ 研究仮説

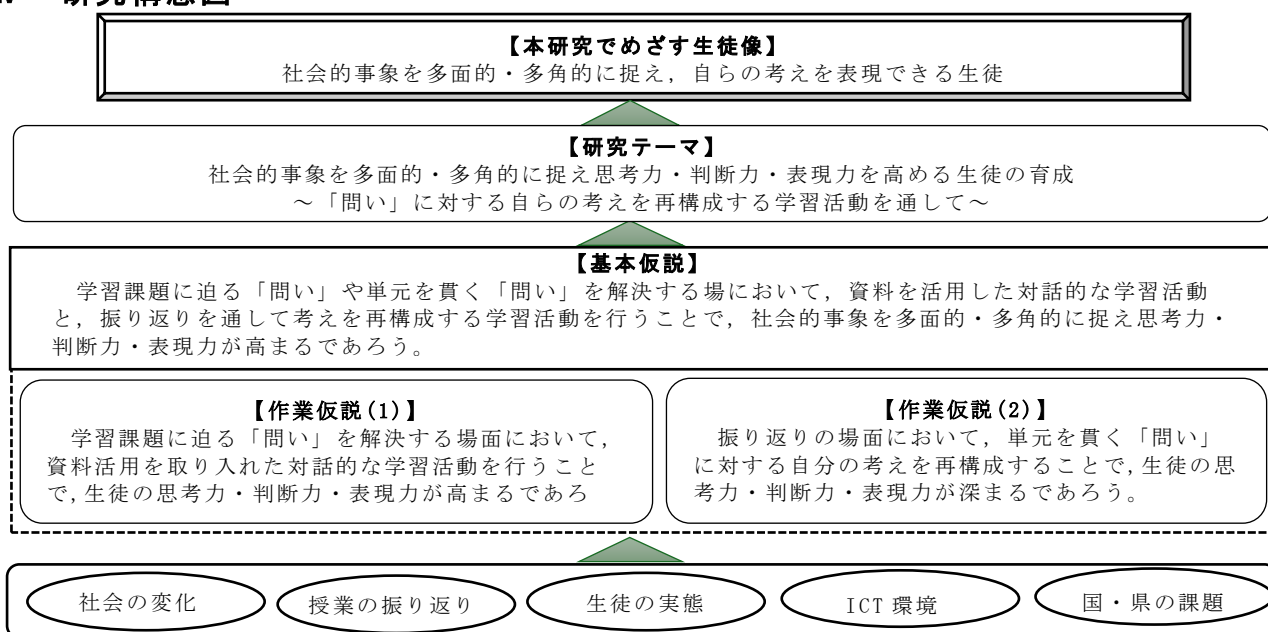
1 基本仮説

学習課題に迫る「問い」や単元を貫く「問い」を解決する場において、資料を活用した対話的な学習活動と、振り返りを通して考えを再構成する学習活動を行うことで、社会的事象を多面的・多角的に捉え思考力・判断力・表現力が高まるであろう。

2 作業仮説

- (1) 学習課題に迫る「問い」を解決する場面において、資料活用を取り入れた対話的な学習活動を行うことで、生徒の思考力・判断力・表現力が高まるであろう。
- (2) 振り返りの場面において、単元を貫く「問い」に対する自分の考えを再構成することで、生徒の思考力・判断力・表現力が深まるであろう。

Ⅳ 研究構想図



V 研究内容

1 社会的事象を多面的・多角的に捉え思考力・判断力・表現力を高める生徒の育成とは

(1) 社会的事象を多面的・多角的に捉える学習活動とは

社会的事象を多面的・多角的に捉えるとは、ある現象について、多様な側面や異なる立場・視点で考え理解することである。そのためには、社会的な見方・考え方を働かせることが必要である。

小学校学習指導要領解説社会編では、「社会的事象を位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること」と示されている。また、中学校学習指導要領解説社会編（以下、解説社会編）では、社会的な見方・考え方を働かせる

とは、「課題を追求したり解決したりする活動において、事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法であること」と示されている。

よって本研究では、単元を貫く「問い」の視点を意識した学習課題に迫る「問い」を解決する場面において、生徒が資料を活用し、他者との意見交流から異なる立場や視点に触れる活動を行う。この学習活動を単元の中で繰り返し行うことで、生徒は、小学校で培った見方・考え方を発展させた、地理的な見方・考え方を働かせるスキルが高まり、社会的事象を多面的・多角的に捉える力が育成され则认为る。

(2) 自らの考えを深めるための対話的な学習活動の工夫

生徒が社会的事象に対して、自らの考えを深めるためには、自分とは異なる見方や考え方に触れる対話的な学習活動が必要である。解説社会編によると、「社会的事象の意味や意義などを考察し、概念などに関する知識を獲得したり、社会との関わりを意識した課題を追究したり解決したりする活動の充実」が求められている。また、「『問い』が生まれるサポートガイド」（沖縄県 2022）によると、生徒の思考力・判断力・表現力を育むためには、「自分の思いや考えを他者に説明したり、話し合うことを通してよりよい考えに導いたりするなど、対話的な活動の一層の充実」が求められている。また、同ガイドでは「子供の思考の可視化・共有・表現のツールとして 1 人 1 台端末を効果的に活用すること」が示されていることから、本研究では、ICT を活用した対話的な学習活動を実践する。

さらに本研究では、学習課題に迫る「問い」を解決する場面で、ペアや数名での意見共有や全体討議を意図的に取り入れる。これらの対話的な学習活動は、生徒が、根拠となる資料を基に自分の考えを表現する力を育成するために有効である。さらに、生徒同士の意見交流の場面を通して、社会的事象を多面的・多角的に捉える力が培われ、その理解もより深まると期待される。このような対話的な学習活動を通して、生徒の思考力・判断力・表現力が高まると考える。

(3) 社会科における思考力・判断力・表現力の育成

解説社会編によると、教科の目標（2）「社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断したりする力、思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う」と掲げている。また、本研究で扱う世界の諸地域の単元では、「主題を設けて課題を追求したり解決したりする活動を通して、地域的特色を大観し理解することや、地域で見られる地球的課題の要因や影響を地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察して表現すること」が求められる。

これらを踏まえ、本研究では、単元を通して地理的な見方・考え方を働かせ、社会的事象を多面的・多角的に捉える活動を繰り返し行う。また、毎時間の授業において、単

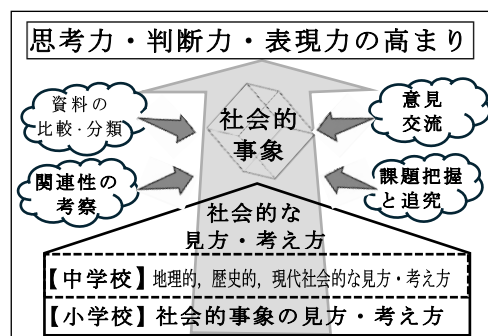


図1 「小学校学習指導要領解説社会編」を参考に筆者作成

元を貫く「問い」や学習課題に迫る「問い」の解決に向け、生徒が根拠となる資料を選択したり、既習事項を基に他者と意見交流したりする活動を取り入れる。さらに、生徒が自らの考えを深め、対話的な活動を積み重ねることで、思考力・判断力・表現力を高めていくことが期待される。

2 「問い」に対する自らの考えを再構成する学習活動とは

(1) 再構成を促す「問い」とは

本研究における再構成を促す「問い」とは、生徒の思考を深く促すための二つの段階的な「問い」のことである。一つは、単元全体の方向性を示す単元を貫く「問い」であり、生徒が単元学習のゴールを意識し、自らの見通しを持つための基盤となる。もう一つは、各授業において、社会的事象や他者の意見との間に生じる「ズレ」や「疑問」から、生徒が解決する学習課題に迫る「問い」である。

宗實（2025）は、学習の中で生じる「問い」をレベルで区分し、「単元の目標や本時の目標につながる問いが望ましい」と示している。この見解に基づき、本研究では、単元を貫く「問い」とその視点を意識した学習課題に迫る「問い」の二つの段階的な問いを設定する。単元や授業内でこれらを解決する場を設定するとともに、自分と他者の考えを比較・共有する場を設けることで、生徒の思考が深まり、自らの考えを再構成する基盤となると考える。

(2) 自らの考えを再構成する学習活動とは

自らの考えを再構成するとは、得た知識や他者との対話を通して、自分の考えを問い直したり知識をつなぎ直したりし、新たな理解や見方から自分の考えを深めることである。また、解説社会編の目標及び内容では、「思考・判断したことを説明したり、それらを基に議論したりする力については、考察、構想（選択・判断）したことを、資料等を適切に用いて論理的に示したり、その示されたことを根拠に自分の意見や考え方を伝え合い、自分や他者の意見や考え方を発展させたりする力を育む」と示されている。この内容を踏まえ、本研究では、振り返りシートを活用し単元を貫く「問い」に対する予想を立てる。その後、毎時間「問い」に対して自分の考えを記録していく。単元のまとめでは、その記録された思考の変容をもとに、単元を貫く「問い」に対して再構成した考えを表現できると考える（図2）。多様な視点の交流が、最終的に単元を貫く「問い」に対する自らの考えを再構成する支えとなる。

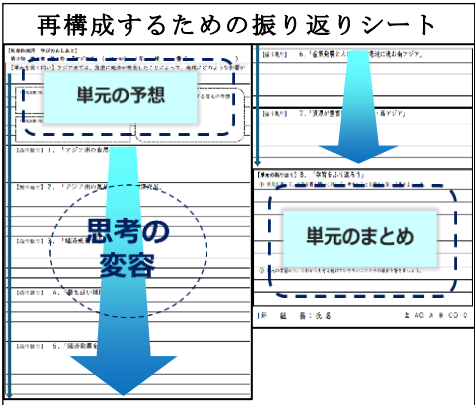


図2 「指導を評価の一体化」を参考に筆者作成

VI 授業実践（第1学年）

1 単元の概要

単元名	第2部 世界のさまざまな地域 第2章 世界の諸地域
内容のまとめ	第1節 アジア州
単元の目標	(1)アジア州の地域的課題は、地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解できる。【知】 (2)アジア州に暮らす人々の生活を基に、各州の地域的特色を大観し理解できる。【知】 (3)アジア州で見られる地球的課題の要因や影響を州という地域の広がりや地域内の結びつきなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現できる。【思】 (4)アジア州の課題について、その影響と解決を主体的に追求できる。【主】

2 「本単元の指導と評価の計画（全 8 時間）」及び「本単元に係る学習の系統」

学習の系統(前)	第2部 世界のさまざまな地域 第1節『人々の生活と環境』 【単元を貫く「問い」】世界各地の人々の生活は、自然環境とどのような関わりがあるのだろうか。
----------	---



単元の指導計画（8 時間）

時	■学習活動 ◇指導上の留意点	重点	記録	【評価項目】：評価方法
1	【単元を貫く問い】 アジア州では、急速に経済が成長したことによって、地域にどのような影響が生じているのだろうか。 ■単元を貫く問いに対する予想を立て、見通しを持つ。 ◇資料を提示し単元を貫く「問い」に対して疑問を持たせる。 1 アジア州の自然環境 ■アジア州を区分し、自然環境の特徴を捉えたとともに、アジア州の気候の特徴について、季節風の影響と関連づけながら考察し、表現する。 ◇関連する資料を提示し、アジア州の自然環境や気候の特色を捉えさせ、学習課題に迫る「問い」について、タブレットを用いて考察し表現させる。	主 思		【主】単元を貫く問いへの予想を立て、その解決に着目し、単元に見通しを持つ。（振り返りシート） 【思】雨温図や景観写真などから雨季と乾季の違いについて季節風の影響と関連付けながら多面的・多角的に考察し表現している。（ワークシート）
2	2 アジア州の農業・文化と経済発展 ■アジア州の農業や宗教、人口分布の特徴を、資料を活用して理解する。 ■アジア州の農業地域の分布と人口分布とを関連づけ、その特徴を考察し表現する。 ◇アジア州の農業や人口に関連する資料を提示し理解させ、学習課題に迫る「問い」について、タブレットを用いて考察し表現させる。	思		【思】年間降水量の違いと農業の特色との関係や、農業地域と人口分布との関連について多面的・多角的に考察している。（ワークシート）
3	3 経済発展を急速に遂げた中国 ■中国では急速な経済成長が進み、生活が変化していることを理解する。 ■急速な経済成長に伴って進行する経済格差や環境問題などの課題について捉え、考えをまとめる。 ◇中国における経済発展と課題を捉え、学習課題に迫る「問い」について、タブレットを用いて資料を活用させ、考察し表現させる。	知	思	【知】さまざまな資料を読み取り、中国経済が成長の特色を理解している。（ノート） 【思】さまざまな資料を活用して経済成長を急速に遂げたことで生じている中国が抱える課題について多面的・多角的に考察し、表現している。（ワークシート）
4	4 最も近い隣国、韓国 ■韓国の生活・文化や産業の特色と、首都圏への一極集中による課題を理解する。 ■韓国の生活・文化や産業の発展について、韓国と日本との関わりに着目しなら考察し、表現する。 ◇韓国と日本の生活や文化の関わりに着目し、学習課題に迫る「問い」についてタブレットを用いて考察し表現させる。	思		【思】韓国の生活・文化や産業の発展について多面的・多角的に考察し、表現している。（ワークシート）
5	5 経済発展を目指す東南アジア ■東南アジアの工業化について、資料から日本企業の進出増加やその背景について読み取り、理解する。 ■急速に経済発展する過程で発生している問題について考察し、表現する。 ◇東南アジアにおける農業の特色と工業化を捉えさせ、学習課題に迫る「問い」について、タブレットを用いて考察し表現させる。	思		【思】経済発展の過程で発生している問題について、農村と都市の両方から考察している。（ワークシート）
6	6 産業の発展と人口増加が急激に進む南アジア ■南アジアの経済発展の様子を、資料を活用して理解する。 ■インドで情報通信技術（ICT）産業が急速に成長した背景と貧困層の問題を、多面的・多角的に考察し表現する。 ◇南アジアにおける農業の特色、成長する産業、課題を把握し、学習課題に迫る「問い」について、タブレットを用いて考察し表現させる。	思		【思】インドで情報通信技術（ICT）産業が成長した背景やインドの抱える課題について、多面的・多角的に考察している。（ワークシート）
7	7 資源が豊富な中央アジア・西アジア ■中央アジアや西アジアの国々は原油などの鉱産資源に恵まれ、経済発展してきたことを理解する。 ■他地域との結びつきに着目して、原油の生産や輸出が中央・西アジアの発展に与える影響について考察し表現する ◇中央・西アジアにおける経済成長の背景と現状を理解させ、学習課題に迫る「問い」について、タブレットを用いて考察し表現させる。	思		【思】原油で得た利益を、交通・通信網の整備や教育などの分野に活用している背景を考察している。また、紛争が多いことの背景を、原油と関連させて考察している。（ワークシート）

8 本時	8 学習を振り返ろう ■地域でみられる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結びつきなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する。 ◇アジア州の地域的特色と課題を捉え、学習課題に迫る「問い」について、タブレットを用いて資料を活用して考察し表現させる。 ■振り返りシートや考察し表現したワークシートを見返しながら、単元を貫く「問い」について自分の考えを再構成する。 ◇再構成させる際、既習事項やキーワードを活用し、自分の考えを表現させる。	思 【思】アジア州の各地域と日本との結びつきをその地域的特色に着目し、経済的な視点から、資料を活用し、多面的・多角的に考察し表現している。(ワークシート) 思 【思】急激な人口増加と経発展が、アジア州に暮らす人々に与える影響や、それによって生じる課題をさまざまな面から捉え、考察し表現している。(振り返りシート)
-------------	--	--

学習の 系統(後)	第2部 世界のさまざまな地域 第3節『ヨーロッパ州』 【単元を貫く問い】ヨーロッパ州では、国どうしの結びつきの強まりによって、地域にどのような影響が生じているのだろうか。
--------------	---

(1) 目標

(2) 授業仮説

(3) 本時の展開

VII 結果と考察

1 作業仮説(1)の検証

学習課題に迫る「問い」を解決する場面において、資料活用を取り入れた対話的な学習活動を行うことによって、生徒の思考力・判断力・表現力が高まるであろう。

【結果】

本研究では、学習課題に迫る「問い」を解決する場を設定し、社会的事象を多面的・多角的に捉えさせるため、資料を活用した対話的な学習活動を展開した。

まず、アンケート結果から、生徒の意識の変化が見られた。アンケートから「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している」と回答した生徒の肯定的な意見が、検証前の74.3%から検証後は87.1%へと12.8%増加した(図3)。

また、アンケートから「対話的な学習活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」と回答した生徒の肯定的な意見が、検証前の82.8%から検証後の96.8%へと14%増加した(図4)。実際の対話では、生徒Aが中国との政治的関係を理由に東南アジアを選んだのに対し、生徒Bは「南アジアの人口」や「インドのICT産業」といった別の視点から意見を述べていた。さらに生徒Cの西アジアに関する発言に対して、生徒A・Bは「ロシアとの貿易」や「ロシアの最新情勢」の視点から意見を述べていた(表1)。

次に、生徒の表現力の変容が見られた。生徒Dは検証前では、世界各地の人々の生活と自然環境の関係の視点から、下線部①②は簡単な表現でまとめていた。しかし、検証授業の記述では、下線部③④の「南アジアの人口」と「ICT産業の成長」という複数の情報を根拠に、「日本との経済的な結びつき」という多面的・多角的な視点から考えを述べた。また、下線部⑤では、資料を活用して根拠を示し、自分の言葉で説明するなど表現力の向上も見られた(図5)。生徒Eも検証前は「スコールや暑さ」といった環境面に視点を当てていたが、検証後には、下線部⑧⑩「日本の食糧自給率と少子高齢化」、下線部⑨⑩東南アジアの「プランテーションと経済的な不安定さ」を関連付けた記述に変容した。さらに、生徒D・Eともに、検証前は、学習課題に迫る「問い」に対する考えをまとめた思考力・判断力・表現力の評価はCまたはBであったが、検証後にはどちらとも評価Aに値する記述を達成した。また、該当クラス全体では、評価Aが9%から39.7%へ、評価Bが44%から52.4%へと増加し、評価Cが47%から7.9%へと減少した。

自分の考えを発表する場面では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している。

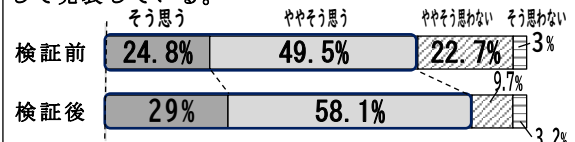


図3 アンケートⅠ

対話的な学習活動を通して、自分の考えを深めたり広げたりすることができる。

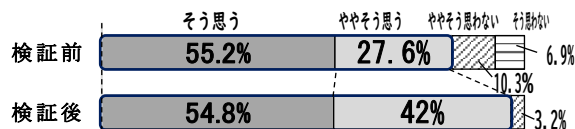


図4 アンケートⅡ

表1 対話的な活動

生徒B：なんで東南アジア選んだの？
 生徒A：中国は日本と関係が良くないから。東アジアは選ばなかった。東南アジアの貧困のために日本が会社を出して、働く場を増やしそこを援助してくれたら、発展して日本のためにもなるから。
 生徒B：東南アジアは発展途上国が多いから、南アジアがいい。バングラディッシュとかの人口を移住させて、日本の労働力を増やすこととインドのICT産業の技術を日本へ持ってくるといいから。
 生徒C：石油の輸入が多い西アジアを選んだ。
 生徒B：ロシアやアメリカから石油輸入できるから、西アジアからでなくてもいいよね
 生徒A：ロシアは今戦争している状況だから輸入できない

検証前：評価C	検証8時間目：評価A
熱帯の人々の生活は、①暑さ対策に工夫した生活をしていると考える。なぜなら、毎日、②半袖を着たり、布製のぼうしをかぶったりしているからです。	私は、日本は今後、南アジアと経済的な結びつきを強めた方がよいと考える。なぜなら、③南アジアはアジア州の中でも、人口が多いです。それに、南アジアは情報通信技術（ICT）産業の成長がとて進んでいて、④日本は、南アジアの力を借り、情報通信技術と経済発展をといったほうがよいと考えたからです。また、⑤右側の資料をみると、南アジアは、綿花の生産が多い国です。日本は、綿花の生産量がとても少なく、他の国を頼るしかありません。なので、南アジアとの経済的な結びつきを強くした方がよいと考えます。

図5 生徒D 学習課題に迫る「問い」に対する思考・判断・表現の変容

検証前：評価B	検証8時間目：評価A
熱帯の人々の生活は、⑥スコールや畳さに耐えるように工夫されていると考える。なぜなら、⑦高床の家や、風通しのいい構造で、オフィスや施設には、冷房がある。また、大抵の人が雨具を携帯しているから。	私は、日本は今後、東南アジアと経済的な結びつきを強めた方がよいと考える。なぜなら、⑧日本の食料自給率はとても低く最近では少子高齢化も進んできている。だから⑨大規模なプランテーションがある東南アジアと友好を強めたほうがよいと考えたから。プランテーションは林業や農業を行っているから、東南アジアと友好的な関係を築ければ、日本にプランテーションを作ってもらうことで、食料自給率は上がると考えたから。それに、⑩東南アジアは未だ経済が安定してないから、そこを日本が補うことができれば、お互いに得があるから東南アジアも応じてくれると思うから。また、⑪日本は右の図を見るに食料自給率が著しく低いから、日本にも、東南アジアの国々に協力してもらって、プランテーションを設立するのはどうだろうと考えた。

図6 生徒E 学習課題に迫る「問い」に対する思考・判断・表現の変容

加えて、アンケートでは、「対話の場面で、タブレットを活用し、資料の提示や文章、話の組み立てを行い自分の意見を伝えることができる」と回答した生徒の肯定的な意見が、検証前の58.6%から検証後は90.2%と31.6%増加した（図7）。

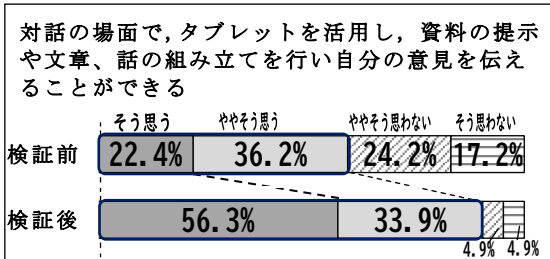


図7 アンケートⅢ

【考察】

アンケート結果から、対話的な学習活動や自分の考えを表現する活動に対して、肯定的な意見を持つ生徒が増加したことで、生徒の意識の変容が見られた。表1に見られるように、対話的な学習活動は、生徒の考えにはない新たな理解や視点をもたらすことで、生徒たちは自分の考えを相対化することができた（図3）（図4）。

さらに、思考力・判断力・表現力の評価でも変化が見られた。生徒Dは、検証前では、一つの視点に着目した記述で評価Cであった。しかし、検証後には、人口やICT産業、経済的な連鎖と貿易等、複数の視点から多面的・多角的に社会的事象を捉えることができた。さらに、根拠となる資料を活用し、論理的に考えを表現した結果、評価Aに値する記述となった（図5）。また、生徒Eも、検証前は建物の作りという単一の視点からの記述で評価Bであった。しかし、検証後には東南アジアの地域的特色や日本の食料や人口に関する課題に視点を置き、経済的な視点から東南アジアと日本との相互依存関係がよいという表現や、根拠となる資料の活用もあり、評価Aに値する記述となった（図6）。どちらの生徒も、学習課題に迫る「問い」に対して、根拠となる資料を活用した対話的な学習活動を行うことで、社会的事象を多面的・多角的に捉え思考力・判断力・表現力が高まったと考える。また、該当クラス全体の評価においても、上位評価が増加し下位評価が減少する傾向が見られた。加えて、アンケート結果と生徒D・Eの記述から、生徒の思考を可視化・共有・表現するためにICT機器の活用が効果的であったことが分かる（図7）。

以上のことから、学習課題に迫る「問い」を解決する場面において、資料活用を取り入れた対話的な学習活動を行うことは、生徒の思考力・判断力・表現力を高める上で有効な手立てであったと考える。

2 作業仮説(2)の検証

振り返りの場面において、単元を貫く「問い」に対して自分の考えを再構成することで、生徒の思考力・判断力・表現力が深まるであろう。

【結果】

本研究では、単元の導入で単元を貫く「問い」に対して予想を立て、授業後に振り返りを行い、単元のまとめで、予想に対し再構成する学習活動を行った。

アンケート「授業内容の振り返りで整理することによって、新たな気づきがあったり、分からないことが理解できたり、自分の考えが変わったりしていることをまとめている」と回答した生徒の肯定的な意見は、検証前の21.7%から検証後は86.1%と

64.4%増加した(図8)。

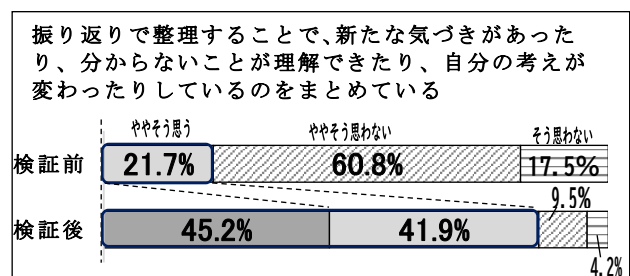


図8 アンケートⅣ

実際の生徒の記述には、思考の深まりが明確に現れている。生徒Fは、検証前は下線部①「高床の家」という一つの地域の特色の記述から、検証後には、下線部②③「世界の工場」と「地球温暖化」といった複数の側面から社会的事象を捉え論理的に説明している(図9)。生徒Gは、下線部④「自然環境と食」の関係性にのみ焦点を当てていたが、検証後には、下線部⑤⑥経済成長のメリットとデメリットや、下線部⑦「電気自動車」や「太陽光発電」といった具体的な解決策を示す記述が見られた(図10)。生徒F・Gともに、検証前は、単元を貫く「問い」に対する思考力・判断力・表現力の評価はC・Bから、検証後には評価Aに値する記述となった。該当クラス全体の評価においても、検証前の評価Aは19.3%であったが、検証後には41.0%へと21.7%増加した

(図11)。また、単元を貫く「問い」の答えに対する思考力・判断力・表現力の評価Aの記述をした生徒は、単元テストの思考力・判断力・表現力を問う問題においも、正答率が高い結果となった(図12)。

検証前：評価C	検証後：評価A
世界の中でも熱帯の気候で生活している人々は、①気温が高く雨が多いため、家を高床にして熱気や湿気がこもらないように作りの家になっている。	アジア州における急激な経済成長は、地域に環境問題が深刻になっていくような影響を与えていると考える。なぜなら、東アジアでは、中国が急速に経済成長を遂げ、②工業品が世界で多く「世界の工場」といわれているが、世界の工場ということは、どの国よりも多くの排気ガスを出しており、地球温暖化が急激に進むからです。これは、同じ東アジアの韓国も同じで、③中国も韓国も海岸付近や首都などに人口が集まる一極集中が問題になっているからです。

図9 生徒F 単元を貫く「問い」に対する思考・判断・表現の変容

検証前：評価B	検証後：評価A
世界各地の人々は、自然環境をうまく使っていると考ええる。なぜなら、④自然環境の影響を使ってそこでしか作れない作物を作ったりその環境にあった食事を生み出したりしているからだ。	アジア州における急激な経済成長は、地域に経済発展を進めることや、SDGsの問題への影響があると考ええる。なぜなら、約50年前から⑤韓国、台湾、シンガポールの順に経済成長を成し遂げ、それに連なり、1970年後半からは、中国が改革開放政策を導入し、急激な経済成長を遂げた。一方で、⑥成長の背景には、二酸化炭素や大気汚染などの問題が年々深刻化してきているから。⑦その問題を解決する取り組みが最近中国では行われています。電気自動車を導入したり、太陽光発電システムを導入したりなど。

図10 生徒G 単元を貫く「問い」に対する思考・判断・表現の変容

【考察】

アンケート結果より、振り返り活動を通して多くの生徒が自らの思考の変容を記録した振り返りシートを基に、単元を貫く「問い」において再構成をする様子が見られた。また、振り返りにおける思考力・判断力・表現力の評価にも変化が見られた(図8)(図11)。

生徒Fは、検証前は、一部の地域に焦点をあてた記述で評価Cであった。しかし、検証後では、中国における発展と課題を相互依存関係として捉えた記述や、隣国同士で社会的事象が見られる等の記述がみられたことから、評価Aに値した(図9)。

また、生徒Gは、検証前は、自然環境と食に関する視点の記述で評価Bであった。しかし、検証後は、政治・経済と環境問題を関連付け、課題に対する対応策の提案や歴史的な見方・考え方を働かせた記述から、評価Aに値した(図10)。どちらの生徒も、社会的事象を多面的・多角的に捉え、思考の変容を記録した振り返りシートを活かし、単元を貫く「問い」に対して再構成する力を身につけることができたと考える。さらに、再構成する学習活動を通して、生徒の思考力・判断力・表現力が深まったことで、単元を貫く「問い」の答えに対する思考・判断・表現の評価において、評価Aの生徒が、単元テストにおいても正答率が高くなる傾向が見られた(図11)(図12)。

よって、振り返りの場面において、単元を貫く「問い」に対して考えを再構成することは、生徒の思考力・判断力・表現力を深める上で有効な手立てであったと考える。

		評価C	評価B	評価A
思 判 表	検証前	38.3%	42.4%	19.3%
	検証後	8.1%	50.9%	41.0%

図11 単元を貫く「問い」の答えに対する思考・判断・表現の評価の変容

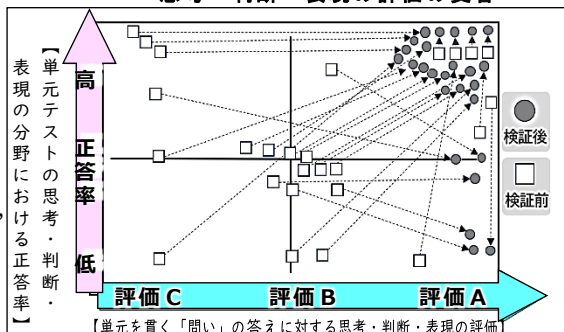


図12 評価Aの生徒と正答率の相関図

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 学習課題に迫る「問い」を解決する場において、ICT機器を用いて資料を活用した対話的な学習活動を行うことは、生徒が社会的事象を多面的・多角的に捉え、思考力・判断力・表現力を高めることにつながった。
- (2) 単元の振り返りの場において、思考の変容を記録した振り返りシートを活用し、再構成する学習活動を行うことは、生徒の思考力・判断力・表現力を深めることにつながった。

2 課題

- (1) 根拠となる資料を活用できない生徒に対しては、他者と資料の読み取り方を共有させたり、複数の資料の情報を比較・検討させたりすることで、適切な資料を選択・判断できるよう支援する必要がある。
- (2) 再構成が不十分な生徒には、複数の出来事のつながりやその背景にある因果関係に気付かせる等の手立ての工夫が必要である。

《主な参考文献》

- 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』 文部科学省 東洋館出版 2017
『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【中学校 社会】』 国立教育政策研究所教育課程研究センター 東洋館出版社 2020
『見方・考え方 社会科編』 澤井陽介 加藤寿朗 東洋館出版社 2017